學の智識が入つた結果か否か之を知ることが出來ぬ。前に述べた一七一〇年にレヂスとヂャルツー兩宣教師の滿洲北部四十七度に於て一度の長さが二五八支那尺だけ長い事實を發見したことはモーペルテユイのペルー及びラップランド兩子午弧測定の結果を綜合した前二十八年で、獨立に地球兩極の扁平を確知したものとして著しい。寛政文化間の日本測地事業は佛國革命政府の下にメチャン、ドランブル兩測地家の測定後に直に著手したもので、而かも地球眞形狀を無視して居ることは、頗る時代後れといはねばならぬ。然れども此の事業は日本地圖の信憑すべきものを調製するといふ第二の目的から見れば大なる成功で、其の實用上の價値が非常に大なるものであつた。此の點からいへば精確の度は支那測地事業などに比して遙かに優秀であつて、歐洲に其頃現存した地圖に比較し得るものが一氣呵成に出來たのである。故に精密の度を細査して見ることも必要である信憑すべき地圖を作り得たといふ點が最も重要な特長であるものと考へねばならぬ。

增補『東達支那記』

Sir H. Yule; Cathay and the Way Thither. New edtion, revised throughout in the light of recent discoveries by H. Cordier. vol. I-III, Hakluyt Society. 1913—1915

文學博士　桑原隲藏

一

ユール H. Yule (1820—1889) は英國に於ける最も傑出した東洋學者である。英國の東洋學者——若干の印度學者を除き——は概して學究的でない。彼等の著書は、一般の讀者には稗益を與へ得るとしても、專門學者を啓發することは餘り多く

ない。學殖の深さに於ても、廣さに於ても、兎角佛獨等の學者に比して、見劣りする樣に想はれる。この間に在つて、獨りユールの學風は頗る學究的で、且つ堅實精緻を極めて居る。彼の著述には、一々その所說の根據を明にし、且つ到る處に有益なる註釋を施してある。一般の讀者を利益すると共に、專門學者にも多大の智識を附與する。この點に就いて、ユールは獨佛等の最も傑出した學者に比して、何等遜色がない。

ユールの代表的著書としては、

（第一）『東達支那記』

（第二）『マルコ＝ポーロ旅行記』The Book of Ser Marco Polo.

（第三）『アングロ＝インド俗語彙解』Hobson jobson: Being a Glossary of Anglo-Indian Colloquial Words.

の三者を擧げねばならぬ。

この中『マルコ＝ポーロ旅行記』は一八七一年の出版で、間もなく一八七五年にその第二版が出來、ユールの死後一九〇三年に公された第三版には、コルディエ Cordier が、原註釋に多大の增補を加へて居る。この外一九〇〇年に、我が東京でその第二版を翻刻した。『アングロ＝インド俗語彙解』は、語學者は勿論、東洋の歷史、地理を研究する學者に、等しく缺くべからざる良參考書である。この書は一八八六年の出版で、ユールとバーネル Burnell との共著となつて居るが、バーネルの死（一八八二年）後、ユールの獨力で完成したものである。この書も亦ユールの死後、一九〇三年にクルーク Crooke が增補を加へて、第二版を公にした。

『東達支那記』は古代より葡萄牙人の東亞來航の頃までの、西方諸國民の支那に關する智識の發達を叙述し、殊に中世期に於ける、キリスト敎徒、マホメット敎徒の支那に關する記錄、紀行を蒐集英

譯したもので、東西兩洋の交通を研究する者には、一日も缺くべからざる參考書と推されて居る。從つて學界の需要極めて多大なるに拘らず、この書は一八六六年、ハクライト協會叢書の一として出版されたのみで、その後久しく絶版となつた。一八九九年に我が東京でやつた翻刻が、幾分學界の需要を充して居るに過ぎぬ。その原版の市場に現はるゝことは實に稀有で、極めて稀に賣買されても、その價格は一部二卷、百圓以上といふ相場である。

所が今回ハクライト協會で、コルヂエに依囑して、原版に多大の增補を加へて、その第二版を發刊することゝなり、學界多年の渴望を醫するを得るに至つたのは、實に一大慶事と申さねばならぬ。

二

アンリ＝コルヂエ Henri Cordier は、現時佛蘭西有數の東洋學者である。殊にコルヂエは、(一)曩にユールの『マルコ＝ポーロ旅行記』の第三版發行に關係があり、旁ユールに對して多大の尊敬と同情を有ち(二)又尤も有名なる東洋學に關する目錄學者として、あらゆる新著新說に通達して居り、(三)更にシャヴンヌ Chavannes やペリオ Pelliot 等屈指の支那學者と昵懇で、直間接に彼等の助力を受け得る便宜を有つて居る等の事情を綜合すると、ユールの事業を繼承する最適任者と申さねばならぬ。

『東達支那記』發刊以後、已に五十年を經過した。この間に東洋の研究は長足の進步を遂げた。故にコルヂエは成るべくユールの原文に手を觸れぬ方針を執つたに拘らず、遂に幾多原文を補足することを餘儀なくされて居る。殊に『東達支那記』第一卷の序論 Preliminary Essays——東西交通の發達の大勢を叙述した部分——には、一節全體を、時に一章全體さへも增補した例がある。例せば第二

章(乙)の「〔支那と〕中央亞細亞との關係」の如きは、全章コルヂエの新に起稿したものである。第二章第三十六節(乙)の「張騫遠征の結果」の如き、第四章第五十五十七節(乙)の「大食」の如き、第七章八十四節(乙)の「ガルデージ Gardizi の道程記」の如き、皆全節新に增補されたものである。

『東達支那記』第一卷の「補錄」Supplementary Notes ——「序論」の參考に供すべき古代の記錄を蒐錄した部分——に對しても、コルヂエは尠からざる增補を加へた。即ち第二章(乙)の「ラテン詩人よりの拔萃」、第四節(乙)の「ヂオニシウス Dionysius 等の拔萃」第九節(乙)の「テオフイラツクス Theophylactus の拔萃」、第九節(丙)の「趙汝适の拔萃」、第十節(乙)の「バルトリ Bartoli に據れる大秦景教碑發見〔の記事〕」第十四節(乙)の「セムパド Sempad の書翰」第十四節(丙)の「クラヴイジョ Clavijo の支那に關する記事拔萃」、第十四節(丁)

の「ニコロ＝コンチ Nicolo Conti の旅行記拔萃」等である。コルヂエは又原著の挿畫をも若干增補した。第一卷の卷頭にある原著者ユールの肖像、及び卷中に挿める西歷一三五〇年のカタラン地圖 Catalan map の如きそれである。

かく原著の本文に對して必要有益な幾多の增補を加へた上に、コルヂエは最近の東洋研究の結果を利用し、原注釋に對しても、殆ど十全の增補を施した——これが抑も第二版發刊の一大目的である——故、今回發行の東達支那記は第一版に比してその內容を倍加した。『東達支那記』の名稱は同一でも、第一版は全部二卷で、第二版は全部四卷となつた。此の如くしてユールの傑作はコルヂエの助力を得て、最新の完全なる服裝で、再び學界に出現して來た譯である。

三

增補『東達支那記』は已に述べた如く、全部四卷よ

り成立して居る。その第二卷は、元時代に支那に觀光したオドリク Odoric of Pordenone の旅行物語で、一九一三年に刊行せられ、その第三卷は同じく元時代のキリスト傳道者の報告書及び波斯のラシッド＝ウッディン Rashid uddin の歴史の拔萃、伊太利のペゴロッチ Pego'otti の東亞旅行案内、元末に羅馬法皇の使者として支那に派遣された、マリニョリ Marignolli の記錄等を收めて、一九一四年に刊行せられ、第一卷は、已に紹介した「序論」と「補錄」より成立して、一九一五（實は一九一六）年に刊行された。最後の第四卷には、元時代に印度及び支那方面に觀光した、イブン＝バッータ Ibn Batata の記錄、及び明末に印度から陸路支那に入つた、ベネディクト＝ゴエス Benedict Goes の旅行に關する記錄を收めて、一九一六年度に刊行される筈になつて居るが、吾が輩は未だその卷を手にすることが出來ぬ。

吾が輩は近頃この增補『東達支那記』の第一卷のみを、匆卒ながら、兎に角通讀した。この第一卷は東西の交通の大體を叙述したもので、やゝ一般的であり、且つ最近に發刊されたものでもあり、更に又コルヂエの最も精力を傾注した所である樣に想はれるから、茲にこの第一卷に就いて、聊か批評を試みやうと思ふ。

吾が輩はこの增補『東達支那記』を、近年稀有の好著として推奬することを憚らぬ。コルヂエ以外の人では、到底此の如き成績を擧げ難いことゝ思ふ。併しその間に多少備を求めたい所もある。通讀の際心付いた若干點を左に開列したい。

(I)「序論」の第一章は、「希臘人及び羅馬人の支那に關する智識」と題し、第二章は「支那人の羅馬帝國に關する智識」と題し、第二章(乙)はコルヂエの新に增補した所で、「〔支那と〕中央亞細亞の關係」と題してあるが、その內容を檢すると、既

に第二章に於て、支那人の羅馬に關する智識の由來を說明する必要から、西漢の張騫の遠征、東漢の班超の經營等、兩漢と中央亞細亞との交涉は、すべて、この章中に記載した結果、新設の第二章(乙)は、たゞ唐時代に於ける、支那と中央亞細亞の交涉を記載するに過ぎぬ。その題目と內容とはよく一致して居らぬ。勿論之はコルヂエが、ユールの原著の順序は、成るべく動かさぬといふ方針から來た自然の結果ではあるが、體裁上面白くない樣に思ふ。較ろ支那と中央亞細亞との關係を、第二章(甲)に置き、兩漢より隋唐若くばその以後に至る迄の支那と中央亞細亞との交涉をこゝに纏め、次の第二章(乙)に支那人の羅馬帝國に關する智識を紹介した方が、前後の脈絡も整ふことゝ思ふ。

(II)「序論」の第四章は、「〔支那と〕アラブ人との交通」であるが、その內容は主として唐時代に限つて、その以後の事實は、殆ど闕略に付して居る。宋元明初にかけて、アラブ人との交通は可なり頻繁であつた。政治上の關係こそ唐時代に劣れ、通商は一層盛大であつた。ユール以後、此等の事實は、既に歐洲の學界に知られて居るに、コルヂエの增補のこゝに及ばなかつたのは、如何なる故であらう歟。

(III)「補錄」の第九章(丙)は、南宋の趙汝适の『諸蕃志』の大秦國に關する記事を、ヒルト Hirth 及びロックヒル Rockhill の英譯から轉載したものである。『諸蕃志』の大秦國に關する記事は、前代の記錄を引用した所が尠くない。趙汝适自身が當時のアラブ商人から傳聞した記事と、前代の記錄をその儘引用した記事とを區別せん爲に、ヒルト及びロックヒルの英譯には、二種の字體を用ひたのを、コルヂエはその儘に轉載したのはよいが、この事に關して何等の注意を添へてないから、英

譯『諸蕃志』を知らぬ讀者は、この二種の字體に就いて不審を生ずる恐がないとも限らぬ。

更に溯つていふと、コルヂエが特に『諸蕃志』の記事を茲に增補した主意が頗る明瞭でない。大秦の記事が重要とならば、『諸蕃志』以上に引用せなければならぬ支那の記錄か尠くない。『諸蕃志』が全體として英譯されたのは、近年のことであるが、その大秦國に關する記事は、早くヒルトの『大秦全錄』China and the Roman Orient に譯載されてあつて、決して新奇のものでない。『東達支那記』は支那に關する西方諸國の記錄を紹介するのが目的で、支那の西方諸國に關する記事を紹介する主意でないから、吾が輩は特に『諸蕃志』の記事を增補する必要ないかと疑ふ。

吾が輩はかゝる『諸蕃志』の記事を增補するよりも、第十五世紀に出來た、『支那物語』Khatainame でも譯載した方が妥當と思ふ。この『支那物語』は、駙馬帖木兒の孫で、沙合魯(シャールク) Shah Rukh の子に當る、兀魯伯(ウルクベグ)の Ulug Beg 使者として、支那に往つた土耳古人の記錄する所と傳へられて居る、補錄の第十七節に、沙合魯から明の永樂帝の許に派遣した使者の物語を收錄する以上、この『支那物語』もこゝに增補附載する方が極めて適切であるまい歟。

(IV) コルヂエが原著の『增錄』を增補した部分には、時にラテン語〔第一節(乙)、第四節(乙)、第九節(乙)〕や、伊太利語〔(第十章(乙)〕を、原文の儘に引用してあつて、吾が輩等にとつて隨分不便が多い。吾が輩等の不便は一私事に過ぎぬが、併しユールの『東達支那記』の功績の一半は、古代語や諸外國語に書かれた記錄を英譯して英國の讀書界に紹介した點に在る。實際原版『東達支那記』の「補錄」に收むる所は、皆英譯に限つて居る。元來ハクライト協會の目的も亦茲に存すること疑ない。されば

コルヂエの方法は、單に吾が輩等に不便を與ふるに止らず、多少ハクライト協會の目的にも適せず、原著者の主意にも副はぬかと疑ふ。

四

(V)「序論」の第二章に、コルヂエは主としてシャヴンヌの佛譯『史記』の序論を根據として、張騫の遠征の事蹟を增補して居るが、吾が輩が曩に發表した「張騫の遠征」と對比すると、隨分間違があるかと思はれる。彼の記事に據ると、

(1) 匈奴が月氏に加へた打擊が前後二回で、第一回は西紀前三世紀の末に、第二回は西紀前一七七年となつて居るが、(卅五頁)家際に與へた打擊は三回で、第一回はコルヂエの通り、第二回は西紀前一七六年、第三回は西紀前一七二—一六〇年とあるべき筈である。

(2) 月氏が甘肅の根據地を去つた年代を、西紀前一六五年と明指してあるが、(卅五頁)之は西紀前一七二—一六〇年間の出來事と想像し得らるるのみで、それ以上精確に、年代を指定することが出來ぬ筈である。

(3) 月氏は甘肅を退去して後、庫車 Kutcha を經て、伊犂河の濠流テケス Tekes コンゲス Konges 二水の流域地に往き、茲に先住して居つた烏孫を擊破して、その地を占領して大月氏國を建設すといふが、(卅六頁)吾が輩の見る所では、月氏が烏孫を擊破したのは、甘肅の根據地に在つた時代の出來事で、又月氏は先住者塞種を攘て、伊犂地方に大月氏國を建設したので、烏孫から伊犂河流域地を奪つたものでない。烏孫がこの當時からテケス、コンゲス二水の地を占領して居つたかも、大なる疑問といはねばならぬ。

(4) 月氏は西紀前一六三年に塞種を擊破して、喀什噶爾(カシガル) Kashgar 地方を占領すとあるが、(卅六頁)

かゝる事實を『史記』『漢書』に見出すことが出來ぬ。

(5)張騫の遠征時代に、大月氏が己に嬀水 Oxus の南の藍市城に都して居つた樣に明記してあるが、(卅七頁)こは確に『史記』や『漢書』の本文と合はぬ。當時の大月氏の根據地は、嬀水の北の監氏城であつて、嬀水の南の藍市城でないことは、吾が輩が己に再三主張して置いた。

(6)張騫の烏孫に使した年を西紀前一一五年と明記してあるが、(卅八頁)之は寧ろ彼が烏孫より歸朝した年代と見るべきであらう。

尤も吾が輩の「張騫の遠征」に對し、藤田(豐八)君は「月氏の故地とその西移の年代」といふ論文を公にして、(大正五年十月の『東洋學報』)月氏に關する地理年代等につき反對說を唱へられて居る。併し藤田君の說には、同意出來ぬ點が多い。吾が輩は今日でも自家の所說を變更する必要を認めぬ。何れ機會を得て、藤田君の敎を請ふべく心掛けて居る。

(VI)東漢以後の事實にも時々間違がある。例へば班超の死後その子班勇が直にその職を襲ひしといふが如き、(四十一頁)、唐の肅宗が玄宗の死後(西曆七六二)に、始めて帝位に即くとなすが如き、(六十三頁)『島夷志略』中の土塔を東塔—The Eastern Stupa—と誤譯せるが如き、(八十一頁)又契丹の舊都を遼陽とし、阿保機の時、早く北京に都すとなすが如き、(百四十七頁)かゝる些細な誤謬は茲に列擧することを見合する。

五

(VII)「序論」の第四節は、支那と大食との交通を述べたものであるが、この問題の研究は、近時我が國で隨分發達した割合に、歐洲では餘り進步して居らぬ。コルヂエの增補した注釋を見ても、この邊の消息がよく窺はれるのである。

この章に『新唐書』の地理志に附載してある、唐の賈耽の廣州通海夷道の一條を引用してあつて、既に二三の學者は、この道筋を解釋して居るが、皆十分とはいへぬ。コルヂエの補注（八十五頁）も、大抵ヒルト及びロックヒル共譯の『諸蕃志』の解釋を引用せるのみで、格別見るに足らぬと思ふ。吾が輩は昨年七月の本誌に掲げた「波斯灣の東洋貿易港に就て」中に、ヒルト等の所說の誤謬を指摘して置いた。

賈耽の擧げた地名中に提颮國がある。こは勿論アラブ人の所謂テイブル Dibul (Dewul) で、印度河口に近き貿易港であるが、曩に吾が輩は『大唐西域記』の謝颮がヅアブル Zabul の音譯であれば、颮の字は bul の音を表すべきものと斷じたに對して、藤田君は幾分疑惑を挾まれた。同君の「宋代の層檀國に就て」（大正五年十月の『史林』）中に、この事に論及して、謝颮、提颮の颮は皆颮の誤なるべく、颮の字は bul の音を表はし得ること言を須たぬと申されて居る。

併し（一）提颮又は謝颮を提颮又は謝颮に作つた實例が見當らぬ。（二）颮の字が唐時代から存在したかゞ大なる疑問である。颮の字の正譌如何は明代から議論があつて、今も多少懸案となつて居るが、多數の學者は、颮は颺の譌字で、唐時代には存在せざるものと認めて居る。吾が輩も颮の字は唐時代に存在せなかたものと信じたい。然れば唐時代の提颮、謝颮を提颮謝颮の誤と認めることが出來ぬ。（三）假に唐時代より颮の字存在せしものとしても、颮の字音は bul を表はすに、爾く適當せるものと認めることが出來ぬ。この三理由によつて、吾が輩は藤田君の新說に反對せなければならぬ。

藤田君が颮の字音を、日の諧聲と見て、ji の如く考へられたのは臆斷である。唐時代に於ける颮の

字音が wit wet 又は wut に近かつたことは、謝颱を一に謝越に作るによつても推測することが出來る。最近に白鳥博士は、その「罽賓國考」（大正六年一月の『東洋學報』）中に、謝颱――白鳥博士は藤田君の謝颮（バイ）を謝颶（グ）と誤認して非難されて居るが之は博士の間違である――又は謝越にて Zawul (Zabul) の音をあらはし得る理由を縷述されて居る。吾が輩も略同樣の理由に據り、提颱の二字を以て、Daibul (Dewul) の音を表はすに格別不都合ないかと思ふ。たゞ白鳥博士が颱の字を颱の譌と認め、颱を曰の諧聲文字と認められたのは、一應の道理はあるが、併し吾が輩の知れる限りに於て、字書に颱の字が見當らぬ故、この說に贊成を躊躇せなければならぬ。吾が輩は提颱、謝颱の颱は、颶の誤でも颱の譌でもないと思ふ。

六

(VIII) 唐時代に大食人の通商した支那の貿易港は、西曆九世紀の半頃のイブンコルダードベー Ibn Khordâdbeh の『道程及州郡志』に據ると、エル＝ワキーン el-Wakîn（正しくはルーキン Loukin）カンフ Khanfou ジャンフ Djanfou 及び カンツ Kantou の四港である。この四貿易港に就いて、ユールは既に可なりの考證を加へたが、コルヂエは更に幾多の注解を增補して居る。（一二九―一三七頁）コルヂエの補注は、極めて周到であるに拘らず、遂にこの四港の位置に關して、何等確乎たる擬定を下して居らぬ。啻にこの四問題に就いてのみでなく、增補『東達支那記』全部を通じて、コルヂエ自身の新說は餘り見當らぬ。新說は姑く措き、廣く異說を集める割合に、彼はその異說に對して何等の批判を加へない、こは本書の性質上無理もないが、併し是非の明白なる舊說に對しては、幾分その取捨を決定するのも望ましい事と思ふ。

(1)エルワキーン正しくはルーキンに就いては、スプレンゲル Sprenger 以來、一般に之を今の佛領東京(トンキン)の河内(ハノイ) Honoi 附近に擬定することになつて居るが、ルーキンといふ名稱の解釋が出來なかつた。コルヂエもユール同樣、ルーキンの位置と名稱に就いて、何等の解釋を下して居らぬ。

我が石橋君は、「唐宋時代の支那沿海貿易港に就て」(明治卅四年十月の『史學雜誌』)中に、アラブ人のルーキンは龍編 Long-Pien といふ地名を訛つたもの主張された。アラブ人は P の音に對して F の字を用ひ、この F の字が屢 K の字と混同するから、龍編がルーキンと訛つたといふのが、石橋君の主張である。從來發表された中で、この說が尤も妥當の樣で、吾が輩も之に贊成したい。

(2)カンフはクラプロート Klaproth が、之をマルコ=ポーロのガンプ Gampu と同一なりと主張して以來、歐洲の學者は概ねこの說に贊成して居る。

マルコ=ポーロのガンプは澉浦の音譯で、今の杭州の錢塘江口に在る、浙江省嘉興府海鹽縣澉浦鎭を指すのであるから、クラプロート等の說は、大體に於て、カンフを杭州に擬定するものである。

勿論歐洲の學者中に、このカンフを廣東に擬した人もあるが、カンフの名稱を解釋することが出來なかつた。石橋君は始めてアラブ人のカンフは、唐時代の支那人の記錄にある廣府 Kwang-fu の音譯と認め、之を廣東に擬定した。石橋君の主張は鐵案であつて、殆ど疑惑を容るる餘地がない。

コルヂエの補注(八十九頁)に據ると、ペリオが一九〇四年の河内の『極東學院雜誌』(B. E. F. E. O.)に、アラブ人のカンフは廣府の音譯で、廣東に當つべきものと主張し居るが、コルヂエはこの說を信憑し難しとて排斥し、ユール同樣に、依然杭州說を執つて居るのは、甚だ感心出來ぬと思ふ。

(3)ジャンフに就いては、ユールは早く之を江蘇の

揚州に擬定した。コルヂエはジャンフに就いて、何等の補注を加へて居らぬ。我が石橋君藤田君ともに、ユールと同說である。藤田君は最近の「イブンコルダーベーのカントウに就いて」(大正五年六月の『史學雜誌』)中に、縷々ジャンフ揚州說を主張されて居る。その他獨逸のハルトマン Hartmann は、このジャンフをジャンジウ Djandju の誤として、之を福建の泉州に擬して居る。(『イスラム教百科全書』The Encyclopaedia of Islam 八四二頁)彼の擬定の理由は殆ど採るに足らぬが、擬定の結果は正確を得て得る樣に思ふ。吾が輩も畢竟ジャンフを福建地方に置く論者である。

(4)最後のカンツに就いては異說が多い。ユールは或は之を黃河の口岸に擬せんとし、或は上海附近に擬せんとし、疑惑の間に彷徨して居る。西洋の學者で、カンツの所在を明に指定したのは、リヒトホーフエン Richthofen で、彼は之を膠州 Kiau-tshou の音譯と見て、山東の膠州に擬して居る。ハルトマンはカンツをカンス Kansu の譌として、杭州に擬定して居るが、これは殆ど問題とならぬ。

我が石橋君はこのカンツを光州 Kwang-tshou の音譯と認めて、之を山東の萊州府に擬定し、藤田君はカンツを安東 An-tung の音譯と認めて、之を直隸の永平府に擬定されて居る。吾が輩は別に、カンツは江都 Kiang-tou の音譯で、畢竟揚州に當つべしといふ新說を提出して置いた。

コルヂエは例の如く、カンツ問題に就いて、格別の意見を發表して居らぬ。たゞ彼はユールのカンツ上海說に對して、上海にては、朝鮮半島の山岳を望み難いと、幾分反對の意を表して居る。(一三六頁)藤田君も亦、畧同樣の非難を吾が輩のカンツ江都說に加へられた。(大正五年六月の『史學雜誌』四十二頁)併し根本史料たるイブンコルダーベ

ーの書中に、カンツから必ず朝鮮の山岳が見にねばならぬといふ記事は見當らぬかと思ふ。從つてかゝる非難は餘り有力でない。

吾が輩は今日でも、カンツ江都說が尤も妥當と信じて居る。藤田君は隨分手嚴しく、このカンツ江都說を攻擊されて居るが、その攻擊は吾が輩の見る所では、何れも有力と思はれぬ。同時に藤田君のカンツ安東說の根據も、可なり薄弱と思ふ。吾が輩は不日別にこの問題に關する一論文を發表する豫定であるから、茲にはすべて省略する。

七

增補『東達支那記』を通讀すると、所在にペリオの新說が紹介されて居る。このペリオの新說が不思議にも、已に發表された我が國の學者のそれと一致する所が多い。例へば我が石橋君の唱へたカンフ廣府說は、同じくペリオによつて唱へられて居る。

（八十九頁）隋唐以來支那人は羅馬帝國を拂菻と呼ぶが、この拂菻の名稱解釋に關する異說多き中に、わが白鳥博士は之をルーム Rûm の音譯と認めれた。所がペリオも亦ルーム拂菻說を唱へて居る。（四十五頁）中世期に西方諸國民は支那を指してタウガス Taugas 又はタムガジ Thamgaj 等と呼んだ。この名稱の解譯にも異說が多いが、白鳥博士は、こは北魏の拓跋 Tak-bat を訛つたものと解釋されたに對して、ペリオも亦略同樣の說を發表して居る。（卅二頁）元の汪大淵の『島夷略志』に、八丹地方の土磚甃塔のことを記載してある。藤田君はこの土塔を以て、印度の馬八兒（マバル）地方のネガパタム Negapatam 附近の所謂支那塔 Chinese Pagoda に擬した。ペリオも亦殆ど同一の說を主張して居る。（八十一頁）

ペリオのカンフ廣府說は、手許に『極東學院雜誌』がないから、その內容を詳にすることが出來ぬ。

ペリオのタウガス拓跋說は、一九一二年十月の『通報』Toung Pao に發表されて居るが、內容はその一年前の一九一一年(明治四四)十一月の『史學雜誌』に發表された白鳥博士のそれと殆と同一である。勿論暗合と見ね、ペリオの論文中に、何等白鳥博士に言及して居らぬ。

吾が輩はペリオのルーム拂菻說が、何雜誌に揭載されたか知らぬが、增補『東達支那記』の注釋によると、一九一五年頃に發表されたものらしい。略同一の白鳥博士の說は、早く一九〇四年(明治三七)八月の『史學雜誌』に揭載されてある。これも亦暗合に過ぎぬのであらう。

印度の支那塔に關するペリオの說は、增補『東達支那記』に始めて見えたが、藤田君のは、その二年前の、一九一三年(大正三)十一月の『東洋學報』に公にされて居る。コルヂエがペリオの言に據つて、藤田氏はペリオと獨立に、同一の結論を得た——has been made independent of him (Pelliot) by Mr. Fujita——と申して居れば、之も明に暗合と見なければならぬ。增補『東達支那記』と直接の關係はないが、最近にペリオの發表した窄軒 Alexandria 說(一九一五年十二月の『通報』)の如きも、十年前に白鳥博士の已に唱道した所で、暗合の一例と認むべきものであらう。

此の如くペリオの說と、我が國の學者の說と、不思議に暗合を重ねつゝ然もペリオの方が、常に若干の年月を後くれて居る。

廣府 Khanfoa 說	石橋君(1901)	同 上(1912)	Pelliot(1904)
拓跋 Taugas 說	白鳥君(1911)	同 上(1915)	
窄軒 Alexandria 說	同 上(1904)	同 上(1915)	
拂菻 Rûm 說	同 上(1904)	同 上(1915)	
支塔 Chinese Pagoda 說	藤田君(1913)	同 上(1915)	

ペリオは學界に重望ある少壯有爲の支那學者である。殊に燉煌石室の祕冊發見者として、その名世

界に聞にて居る。今は北京に滯留中であるが、先頃ある日本の學者と面晤した時、彼は日本に於ける支那學界の不振を切言したと傳へられて居る。如何にもわが支那學界の不振は掩ふべからざる事實で、精進倦なきペリオ等に對して、實に慚愧忸怩に堪へざる譯である。併し飜つて一考すると、かく不振を極めて居る我が支那學界も、其內面は案外に進歩して居るものか、世界有數の支那學者たるペリオの熱心に研鑽して得た結論と、略同樣な結論を獨立に然も一層早く得つゝある若干の學者の存することを思へば、幾分自から慰むるに足ると思ふ。我が國の支那學界に好意を有すべきペリオがこの事實を知り得たならば、必ず衷心より歡喜する筈と思ふ。

紹介

圖書

三浦の安針

加藤三吾著

本書は西紀第十七世紀初期、端なく我國に漂着して將軍家康の寵眷を受け、相州逸見に於て采邑を食み、江戸日本橋の安針町に永く其名を留めし本邦初渡の英人ウヰリアム、アダムス卽ち三浦安針の事蹟を叙述したるものなり。而して著者は安針が埋骨の地として因緣深き平戸に在ること多年、此間博く史料を涉獵し安針の事蹟に就て實地に踏査し、精緻なる研究を遂げたる篤學の士なり。本書全篇を十章に分ち、第一章乃至第三章は近世の初期、東西兩洋交通の機運漸く開け、歐人の東洋に來航するに至りし次第を述べ、第四章「安針の前半生」には彼が幼時の經歷より和蘭東印度商會の船員として本國を出帆し、途中幾多の艱難に遭遇して我國に漂着せし事情を叙し、第五章「安針の活動時代」には安針が家康の顧問として專ら外交事務に貢獻せし功績を述べたり、第六章「オランダの通商」第七章「イギリスの通商」に於ては英蘭兩商館の爲めに幕府との交涉の任に當り、兩國貿易の利便を計りしこと、第八章「安針の晩年」には彼が北海回航を企て、果さず